

井戸田総一郎先生のもとで学ぶ喜び

松 澤 智 子

井戸田先生との思い出を振り返ることは、私自身の歩みを振り返ることでもある。私がこれまで明治大学で過ごした日々は、井戸田先生を抜きにして語ることはできない。

十数年前、明治大学・ウイーン大学共同シンポジウムの記事を大学のホームページで読み、「大規模な行事ができる大学は素晴らしいなあ」と印象に残っていたことが、私が明治大学を受験したことに繋がる。後にシンポジウム開催にあたり、中心的な役割を担った一人が井戸田先生であったことを知るが、いま考えると、私は入学前から先生と縁があったのだろう。

私は二〇一二年四月に文学部ドイツ文学専攻の二年次に編入したのであるが、それは前年に起きた東日本大震

災の影響が大きい。私は、高校卒業後に進学した大学が好きになれなかった。友人も作らず、サークル活動もせず、必要単位だけを修得して卒業した。社会人となり年齢を重ねるにつれ、貴重な時間を無駄にしていたことを後悔し、第二外国語で履修していたドイツ語を学び直すうと思いついた。心底嫌だったドイツ語の面白さに気が付き、「いつか大学でしっかり学びたい」と考えていた最中に震災が起きた。「いつか」などと悠長なことを言うてはいられない。やりたいことを今やろうと決断した時、シンポジウム記事を思い出したのである。

井戸田先生のお名前は予てから存じており、明治大学に合格したら先生の授業を履修することを決めていた。編入試験の面接で、初めて先生に会った瞬間の感動と緊

張を今でも覚えていて。先生は私の試験回答を幾つか指摘し、志望動機や卒業後の進路などを質問した。当時は、数年間の大学生活を終えたら再び職に就こうと考えていたので、大学院進学はもとより、先生が定年退職されることまでは想像が及ばなかった。

入学年度に履修した先生の授業の一つがドイツ文学史だった。「教養の塊」を彷彿するほど、豊富な知識が井戸田先生から次々に溢れ出てくる。話が途切れることは決してなかった。一つでも聞き洩らすとまったくいけない内容で、授業は毎回あつという間に終わってしまうのである。ある日の授業で「明治大学が協定を結んでいるドイツの大学を紹介します」と、井戸田先生がバンベルク大学を紹介してくれた。スクリーンに映し出されたバンベルクの街並みに衝撃を受けた。授業終了と同時に、どうすればバンベルク大学に留学できるのかと先生に尋ねたところ、大学院間の共同研究実績はあるが、学部間はまだ協定が結ばれていないとのことだった。「希望があるなら協定を進めてみましょう」と先生は言うてくださったが、正直に告白すると、協定が結ばれるまで一年近くかかると思ったので期待していなかった。ところが数ヶ月後、学部間協定を結んだ、と先生から連絡を受けた。

衝動的に発した言葉が現実になり、戸惑いながらバンベルクへ出発した。不安を抱いて始まった留学であったが、一年間で得たものは多く、何ごとにも代え難い体験になった。留学先で現在も続けている研究のテーマを見つけ、知り合った人たちとの交流は今なお続いている。多忙を極めた中で、学生の言葉に添えてくださった先生のご尽力には感謝の言葉もない。

研究者としての井戸田先生の真摯な姿、その圧倒的な偉大さに直面できたのは大学院の授業である。国際的なニーチェ研究者の授業を受講できたことは、なんと幸せなことであつたのだろうか。先生の授業では、ニーチェの詩に触れることが多かった。一語一語を丁寧に理解し、リズムとメロディを感じ、情景を浮かべる。時代背景や作者の心境を加味して、先生は作品の文学的意義を確実に把握する。それを当然のごとく軽々と成し遂げてしまう先生の授業を受けるたびに、学ぶ楽しさを実感し、先生のもとでもっと学んでいたいと強く願うのであった。無理とは知りつつ、私も先生を真似て解釈に挑むのであるが、目も当てられない結果であった。博士後期課程に進学した時、先生から「これからは、あなたを研究者として扱いますからね」と告げられた。思いもよらぬ突然

の研究者扱いに私は驚き、どうすればいいのか困惑した。先生が常々おっしゃられる「とにかく書き続けることが大事」という言葉を信じて執筆しているが、上達を感じられないまま現在に至る。困惑はこれから先も続くだろう。

箸にも棒にもかからない私を先生は根気よく指導を続けて下さいました。出来が悪いながらも、私が研究を続けていられるのは先生のおかげです。井戸田先生にお会いして、多くを学ぶことができました。本当にありがとうございます。先生のご健康と、豊富な知識と鋭い感性に満ちた研究が永続することをお祈りいたします。